

Fast life, slow life

村越真のオリエンテーリング日誌 2010年12月-2011年2月

体調と楽しさを天秤にかけつつ過ごしたこの2ヶ月。振り返れば、一緒に楽しむ仲間の存在を強く実感した二ヶ月でもあった。



トレランの「ライバル」佐藤光子さん率いるチーム・ハニーのメンバーと、我がチーム「ファンタジスタと走るコアラ」。ライバル宣言したものの、完敗であった。「ここ、私たちのホームコースですから」と慰めて(?)くれた。箕面ロゲイニングにて

■古き良き時代

12月21日

地元スポーツショップのトレラン部の監督に、義理から就任した。だいたいトレラン部(クラブ)なんて成立するのだろうか。部費はただとは言え、行事があるわけでもないのは詐欺っぽい。最初はやや冷めた目で見ていた。クラブが変わり始めたのは「主将」の望月将悟さんが、トランスジャパンで優勝して、その道すがら応援イベントをやったあたりからだ。秋には市内の山間地集落からトレランのイベントをできないかという打診があった。精鋭メンバーでコース下見などをした。トレランがクラブ活動として成立するのは、全国でも希有で画期的なことだと思う。

そのトレラン部の忘年会、仕事を共有する者どうしの飲み会は楽しい。仕掛け人であるスポーツショップの海野店長も、最初は客を囲い込みたいという商売っ気はもちろんあっただろう。でも「今はもうけなんかどうでもいい。」その言葉が誇張に感じないほどの入れ込みようだ。オリエンテーリングの古き良き時代に、利益を度外視した熱意

ある先人たちのことを思い出した。

12月22日

暮れまでに仕上げようと思った論文の二本目をほぼ仕上げ、今年も何とか越せそうだ。

2年後のユニバーに出たいという静大4年の若山とゆっくりジョグをした。オリエンテーリングと一緒にする時間はなかったので、地図を読みながら学内を走った。前線の病院にやってきて、重傷のまま放置されたあまたのけが人を目のあたりにした軍医の気分だった。

■JOAにできること

12月25日

JOAの理事会。大きな話題は新法人への移行。面倒な作業とは言え、形式的には粛々とやるだけのことだ。組織の目的も明確だ。しかし、そのバックグラウンドには、私たちの全国組織の意志決定をどう設計するか、財政的に誰がどのような責任を持つのかというポリティカルな大問題が待ち構えている。前向きな議論は楽しい。

12月26日

10時から、「森を走ろう:アスレティックアウトドアの現状と課題」もランニング学会と共催で開催した。ここ5年間トレランのイベントやランナーと関わる中で、トレランの可能性と問題点を強く自覚した。ランナーと登山者や自然保護とのコンフリクトも顕在化しつつある。この状況は、爆発的に人気が出た1970年代のオリエンテーリングにも似ている。そんな問題意識と、市民ランニングの教祖的存在である山西さんをJOAの会長に迎えたことで、このシンポジウムへの具体的な歩みが始まった。

一体、誰がどのくらい関心を持ってくれるのだろう。半信半疑ではあったが、実際には150人近い申し込みがあった。トレランプロパーに近い人が半分、オリエンテーリング、登山関係者が1/4弱づつ、その他のアウトドア関係者やメーカーの方。

分科会では、イベントづくりのセッションを担当したが、オリエンテーリング外の専門の方から、何度もナビゲーションにおけるオリエンテーリングの役割の重要性を指摘された。リップサービスかもしれないが、そのような評価を外部からもらったことは、このシンポジウムの大きな収穫の一つだっ

た。周辺領域との交流は自信とアイデアの大きな源泉である。

唯一女性のパネリストであった番場さんの「ランステ」ならぬ「トレランステ」の提案や、オリエンテーリング常設コースを気軽にトレラントレーニングの場に、という細やかな発想も、オリエンテーリングのPRには大きく役立った。こうして自分たちのトップアスリートの活躍の舞台を作ること、組織の役割の一つなのだろう。

一方で、関わる人たちの志向性の齟齬も強く感じた。マイナーだからこそ、そんな齟齬を感じずに過ごすことができたオリエンテーリング界は、マイナー故に幸せな世界だったとも言える。



「森を走ろう」トレランシンポジウムで、PCの活用をさりげなくアピールする番場洋子さん

12月29日

全日本の地図調査もほぼ見通しがついた。調査を1時30分に切り上げ、朝霧の三好礼子さん宅に出向いた。彼らとは、富士山一周トレイルランニングを計画している。自然保護との関係で、富士山南麓で予定していた林道が使えず、急遽海拔の低い場所を通過する必要ができた。そこに果たしていいトレイルがあるのだろうか? 富士山南麓の海拔の低いところといえば、ほぼオリエンテーリング地図がある場所だ。見返してみると村山口と勢子辻をつなぐ送電線の下には管理道があるようだ。その情報を届けにいった。

三好礼子さんは、日本人女性としてはじめてパリダカールラリーに、しかもバイクで参加した国際ラリーストで、エッセイストでもある。この人の行動力は後で嫌というほど実感することになるのだが、馬力だけでない対人スキルの高さと賢さ、そしてもちろんかつては平凡パンチのグラビアを飾ったと

いう美しさには、いつもほればれ。

12月30日

山ごもりと称して、父親が住む雪の中の別荘を訪ねた。ネットも通じず、車もない雪の中の別荘地、やることなければ少しは休むだろうと、正月までいることにした。

今年は里雪で林道の雪も少なく、走ることでもできる。期せずして二日間ハードに追い込むトレーニングをした。胸の痛みは出るが、消化器系の問題のようだ。もっと先にいけるんじゃないだろうか？そう思えてしまった。

1月1日

苗場からチャコの実家の新座へ。元旦からあいてないよなと思いつつ、池袋のアートスポーツに寄ったら、なんとイノベイトのトレランシューズが安売りされているではないか。オリエンテeringにも使えるピン付きの靴を衝動買い。新座の実家の最寄り駅は東上線だが、かつて住んでいた西武線の東久留米から6km歩いてみた。周囲の武蔵野の雑木林は、僕のオリエンテeringの原点でもある。

1月2日

読図本の改訂版の推敲を4章半ばまで進め、午後からロゲイニングの写真撮影に出かけた。

有度浜の遠望写真を撮るために久能山東照宮に行くが、さすがに正月二日、初詣の客でいっぱいであった。3時間ほど動くが、2時間ほどで太ももにずしんと来て、最後は歩く始末。都合28kmのトレーニング。

1月7日

JOA 協賛のエバニュー社で、店頭宣伝用の写真撮影兼新年会に出かけた。遊び半分で出かけたら、プロのカメラマンがスタジオで照明までつけた本格的な撮影会だった。若い選手たちが同社が扱うウェアを着せられて、ポーズをとる。ちょっと羨ましかった。こんなことも、組織の役割の一つなのかもしれないと、ふと思う。



ちょっとしたスター選手気分？エバニューの撮影会に臨むトップ選手たち。左から番

場洋子、小林遼、田島利佳、朴峠周子

1月8日

今でも年賀状のやりとりのある小学校の恩師が三郷に住んでいる。その三郷でパーク O。折しも今年受け取った年賀状には、「東京に来る時があったら連絡ください」。東京どころか三郷にいくのだ。36年ぶりに電話をしてみたら、お昼をご一緒することになった。教育学部に勤める今、小学生の自分には見えなかった先生どうしの確執の昔話が興味深い。

夜は TEAM 阿闍梨の新年会。レース後は、疲労か夜の飲み会まで不調続く。追い込む後遺症は大きい。それを不可欠な代償と思えるかどうか。

1月10日

大学の裏でオリエンテeringができると言えばうらやましがられるが、技術的に見れば週2日使い続ける地図でオリエンテeringをすることがいいことなのかどうかは大いに疑問だ。

幸いなことに地図のレベルはあまり高くない。きっちり調査したら、フレッシュな気分が練習ができるだろう。きっちり丁寧に作り直したら、きつとうっとりするくらいいい地図になることは一部のエリアの調査で分かっていた。それを実行に移すいい機会だと言いつけて、山に入る。とにかく最初の一時間が寒くて往生した。O-map 原図は中途半端に信頼できず、なかなかほかでもない。

■アウトドアの安全と安心

1月11日

東京で山岳雑誌 PEAKS (ピークス) の座談会。先週になって急に打診があったのだが、内容が山岳遭難へのリスクマネジメントとあれば、万障繰り合わせて出かけた。

僕と二人のプロガイドの方にライターさんを加えた座談会で、時間の関係で話が深まらないフラストレーションはたまったが、プロガイドのリスクに対する視点は、コアを共通しつつもそれぞれに違っていて興味深かった。

1月14日

静岡 OLC 新年会。会場の居酒屋の近くの銭湯まで走っていく。20年近く前、大井川鉄道の徳山から東海自然歩道を走り、静岡まで戻ってきて、ここで一風呂あびて、新歓コンパに出かけたのを思い出した。

1月20日

センター入試の代休をとって富士方面での用事をいっきに片付ける。ほんのちょっと残っていた全日本調査を仕

上げ、その後は田貫湖に行って軽く走った後、ホールアースという自然教育団体がロゲイニングをやりたいという相談に乗り、その後一度行ってみたいというホリスティック医療を掲げる朝霧高原診療所で診察を受け、最後は野外活動センターに行き、富嶽周回と野外活動指導者講座の相談。

ナヴィゲーションやそれを活用したゲームというコンセプトは少しづつだが、アウトドアの世界に浸透しつつある。今は小さな落石やチリ雪崩のある場所にいるが、眺望の開ける稜線は間近なのだ。

1月22日

同僚から頼まれた静岡市の高校生卓球チームのメンタルマネジメントを実施した。メンタルマネジメントというと、どちらかというとリラクゼーションや上がりへの対応がクローズアップされるが、むしろ目標設定の技術と考え方こそ彼ら高校生に学んでほしい。それは必ずやスポーツだけでなく学習や仕事にも役立つ考えのはずだ。そして、それを伝えることこそ、全日本15連覇の後に唯一お祝いの言葉を贈ってくれたシドラー氏の示唆でもある。

1月23日

トレーニングを兼ねながら、来週の有度山ロゲイニングのための最後の Cp 撮影を行う。試走中の参加者に会う。最近是有度山を走る人も増えている。静岡のトレランの普及に少しでも貢献できたことを実感できるのは、運営者冥利に尽きる



翌週のレースを前に試走する参加者。地元スポーツショップのトレラン部の一員だ。

1月27日

1990年代初頭、静大のコーチングを始めた時、学生と一緒に始めた練習の一つが半期に一度の12分間走だった。それから5年くらいは続けたのだろうか。学生に計測の習慣がなくなってから、自分自身もそこから遠ざかった。測りたいというモチベーションもなくなっていた。学生からトレーニングの相談を受けた時、「まずは自分の力の把握でしょ」といって、12分間走をや

ることを提案した。10年以上ぶりの12分間走は3240m。全盛期に比べれば10%落ちとも言えるし、その程度でとどまったとも言える。十分にやる気になれる記録だった。

■トレイル三昧

1月29日

有度山トレイル三昧の週末である。土曜日はトレイルランニング、日曜日はロゲイニング。両方をクロスオーバーして楽しんでもらいたい。そんな趣旨から始めた大会だが、これまで両方を出る人が少なかった。今回により嬉しかったのは、かなりの人が両方のレースに出てくれた人だ。

日本のアウトドア界は種目の垣根が高すぎる。互いに垣根をとっばらって行き来できればもっと愉しくなるし、ひょっとしたら速くなったり、より安全に行動できたりするはず。そんな考えが少しずつ受け入れられているのを感じる。

もう一つは3年目にして、夜の交流会が本格的に実施できたこと。これはスポーツショップアラジンの海野さんの尽力が大きい。いくらこじんまりした大会でも、大会会場では落ち着いて、憧れの選手と話すこともできない。人間仲良くなるには飲み食いしないとね。強面の自衛隊員と思っていた後藤さんが意外と優しくなったり、なんてこともこんな機会だからこそ分かったのだろう。

翌日のロゲイニングでは、90組250人近い人の参加を得た。詳しい報告は「3つのロゲイニング」を参照。



日本一美女の像の似合う街清水。今回のロゲイニングはその清水の魅力を全面に出して、参加者にも楽しんでもらえた



ロゲイニング当日の集計は阿闍梨と静岡オリエンテーリングの皆さんの大車輪の活躍で乗り切った。約90組の写真を確認、採点、集計と確認、順位確定を40分以内にやりきった。そんな仲間がいるからこそアイデアも生きる

2月1日

今日も400mインターバルをやってみる。途中、つらさはあるが、気持ちよく力を出し切れた感じ。タイムも合計で前回よりも50秒以上速い!!本当に強くなれるかもしれない。

2月5日

休日出勤で入試の面接。午後の間時間、裏山の地図調査に出かけるが、ありえないほど疲れていた。30分やっても、倒れそうなほどなので、帰ってきた。昨日で終わった授業その他の疲れがどっと出た感じ。

2月6日

注目していた安倍川と大井川の分水嶺あたりのトレイルの下見に出かける。朝起きてみると、疲労は抜けていなかった。このまま寝続けようか、それとも起きるべきか、寝床の中で15分以上迷った。結局、気になる地形とトレイル、そして山間地の集落を見たいという欲求が勝った。

走り出して30分ほどすると、倒れこみたくなるほどに意識が低下したが、歩いていたら、なんとか走れるまでに復活した。名前と地形に引かれて無双連(むぞれ)山までジョグ。途中の幡住や小猿郷は、昔は徒歩道でしかいけなかったような集落だが、今でもひっそり数軒が暮らす。政令指定都市の中にそんな集落を見つけるのもトレランの楽しみの一つだ。

そんなコースハンティングのメールを望月将悟さんにしたら、「今、僕の中で(同じエリアが)熱いんです」という返事が返ってきた。新たな仲間たちの輪が広がりつつある。

2月10日

JR大人の休日倶楽部講習の初日。今回は、30人の募集に約50名の応募があった。かなり疲れ気味。クラブと一緒にのトレーニング。4年生がよくついてきた。自分にもちょうどよい復活のトレーニング。

2月11日

朝霧野外活動センターで、野外活動指導者向けナビゲーションの研修を松澤と宮内で担当した。朝から天気は悪く、朝霧一帯は終日雪が降っていた。外にでるのも億劫なほど雪が積もっている。

しかし、いいこともあるもんだ。夜の等高線の授業では雪を積んで山を作ってみた。喜んで雪遊びをしているのは講師の方だ。等高線を描いてみよう、黒ひもがいいかな、いや絵筆で線を書いて見たら?そんなアイデアを次々と口走る。センターの若い所員たちが、必要なアイテムをすぐさま取りに行く。僕にとっては当たり前の等高線描きをさらさらとやってのけると、彼らは大喜びしてくれた。



悪天候もアイデアと熱意で、教材に早変わり。こんな即興が講習の楽しみだ。

2月12日

翌日雪はやんだが、森の中に入るにはちょっと積雪が多い。宮内が朝一で写真をとってきたのを教材にして、地形と地図の対応をやった。雪がふった冬山は地肌が見えるので、木の枝と地肌のコントラストがはっきりする。これも雪の効用だ。その日の午後は雪中のオリエンテーリングと、等高線を出題して、グループでそれに対応した雪山を作るという課題をやった(らしい)。

こんな即興が、意外と楽しく、受講者の記憶に残るんじゃないだろうか。それがいとも易々実現できるフィールドと一緒に仕事ができることは、きっと幸福なことなのだろう。

僕は昼前に朝霧を出て京都に移動した。学生とロゲイニングに出ることにしたが、彼らの経済状況を考えると車しかあり得なかった。先週の不調で、この移動にはすっかり消極的になっていた。移動はできても肝心のロゲイニングが走れないのではないだろうか。

そんな心配も杞憂に終わった。京都では久保さんが懇親会をセットしてくれた。翌日のロゲイニングも、朝から眠気はあったが、僕にとっては気楽に勝負に挑めるレースだった。

(村越 真)